

Title	北京だより
Author(s)	山本, 一清
Citation	天界 = The heavens (1939), 19(218): 235-235
Issue Date	1939-05-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/167825
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

括弧内は2人のみが認め得た流星數である。第1欄たる AB 以下の6つの場合は兩觀測者の注視點間の角距離（大圖距離）が約 44.5° であり、A—C 以下の6つの場合は 84° であり、A—D 以下の3つの場合は 100° であつて、其の認め得る流星數は兩者の角距離の大小によつて甚だしく相違することが明瞭に結果にあらはれてゐる。

3つの場合の平均流星數を1人にて認め得る平均流星數にて除す時は、

第1の場合（距角 44.5° ）	1.63
第2の場合（距角 84° ）	1.87
第3の場合（距角 100° ）	1.95（最大の場合）

となる。又全部の場合を結合して總平均をとれば 1.79 なる値を得る。（未完）

北 京 だ よ り

去る三月の中頃、私用のため、急に京都を出發し、十七日の夜、北京に着きました。そして序でに、時局がら、各方面を視察しやうと考へてゐるうちに、不注意から、風邪にかゝり、しかも其れがゴジれて、だんだん悪くなり、遂に病院生活にまで發展しましたため、思ひがけなくも、北京の滞在が永く延びて了ひました。今後は、五月末まで北京に居り、六月一パイは滿鐵沿線で講演旅行し、六月末か、又は七月初に京都へ歸る豫定であります。

退院して、まもなく、岡林彗星の發見の通知を受け、多少の處置をしました。が、五月三日には又、皆既月食が見えるといふので、前々日あたりから準備し其の蝕の當日は二三の友人たちと共に、見事に晴れた空を仰いで、蝕の始まりから終りまで、完全に觀察しました。比較的に光りの薄い皆既月食のやうに思ひましたが、とにかく立派なもので、小型の望遠鏡により、心ゆくまで眺めました。

蝕の翌朝、

北京東堂子胡同22號

山 本 一 清